
永遠のエLEMENT ~the eternal knight~

wlmtnk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠のエLEMENT ~ the eternal knight ~

【Nコード】

N0954X

【作者名】

wlmtnk

【あらすじ】

少年は導かれる。

そこは異世界“シギラス”。

少年は出会う。

一人の少女に。

少年は想う。

少女を守りたいと。

その全てを守りたいと……

夢は現。

夢はいつか終わるから夢。

異世界ラブコメファンタジー
ここに奏でられる物語。

読んで下さった方、
本当にありがとうございます。

こちらの作品、別サイトで掲載させて頂いた作品と同じ内容となっております。

作者の一身上の都合により、こちらのサイトで連載させて頂いたきます。

別サイトでのこの作品を御存じの方は、本当に申し訳ありません。
ただいまそちらのサイトにログインできない状態のため、このこと
をお知らせできておりません。

ープロローグー（前書き）

全てのモノには始まりがあり

全てのモノには終わりがある。

それは千年不変の永遠の原理。

それは未来永劫変わる事はないだろう。

く古代戦争伝記序文・著——く

ープロローグー

「もう、やだよ……」

あらゆる負の感情が入り交じってしまったかのような暗澹とした夜の闇。暗い香を伴う硝煙が立ちのぼる中、一人の少女が今にも消え入りそうな声で呟いた。

「どうして、どうしてなの……」

私は、そんなこと絶対に信じたくない……

せっかく、出会えたのに……

一緒に過ごして来たのに……」

少女の頬に零れ落ちる雫。熱いそれは辺りの僅かな光を一生懸命拾い集めようとし、精一杯の光を放とうとする。

「本当に……大好きだったのに!!」

暗い地面に光は零れ落ちる。

零れた光が弾けて——輝いた。

俺は選ぶ

大丈夫、俺はお前の永遠だよ

きつとまた……会えるから

——あなたは見えていますか。

——あなたは聞こえていますか。

——あなたはわかっていますか。

——私は——怖かった——逃げ出した。

——それはきっと、物語。
果てには、何が広がる。

永遠のエLEMENT (the eternal knight)

日常
(前書き)

日常

その季節は芽吹きを終え、何もかもが映える。

桜は華やかな時を終え、葉桜となった季節。失敗した自己紹介のことをまだ引きずっている奴もいる時期。

そんな季節にベッドに寝そべり、幸せそうな顔をしている至って平々凡々な男子高校生——雨霧 あまぎりかおる 薫がいた。

他の人と違う所は一人暮らしであり、両親がいないって事程度。

父親はものごころつかぬうちに亡くしたらしく、母親も数年前から行方不明となっている。

それでも薫という少年は、‘日常’に暮らしていた。

朝、目覚ましが一つの小さな部屋で、耳障りな音色を鳴り響かせている。

やがて、目覚ましはなかなか起きない部屋の主に向かい音量をさらにヒートアップさせる。

「あーっ！うるせえ！」

目覚ましに理不尽なる拳の鉄槌。不幸なそれは気の毒にも部屋の主に殴られ、床に落下し、動きを止めた。また一つ、尊い目覚ましの命が失われた。

部屋の主……雨霧薫は床に落ち、動きを止めた目覚ましを拾い上げる。

「また潰れた……てか時間……やべっ！」

薫は時間を見ると、慌ててベッドから跳ね起きた。そのまま部屋のクローゼットから素早く制服を取り出し、階段を駆け降る。

「朝飯は……時間ないな、今日は抜きだ」

薫は時間から素早く適切だと思える判断を下すと、寝間着を脱ぎ、ズボン、Tシャツ、カッターシャツを身につけ、玄関に向かう。

「行ってきます……」

返事は決して返ってこない。一人暮らしなので当然なのだが、やはり淋しさが漂ってしまう。

薫は何度思っても慣れない気持ちを抱えながら玄関横に掛けてある学生鞆を取り、家を飛び出していった。

空は晴天。雲一つ無し。

「ハアハアハアっ！」

薫は息を切らしながら走りまくり、一気に市立河風高校の校門を駆け抜ける。

そして高校の時計台の時刻を見た時……

「はい！？」

がっくりと薫はうなだれた。まだ時刻は八時、始業にはまだ三十分は余裕があったからである。

「あのクソ目覚まし！最初から狂ってたのかよ！何の恨みがあつてこんなサミットを起こしやがったんだああ！」

理不尽な怒りによって引き起こされた混乱により言葉が少々乱れに乱れまくる。

そのまま薫は歩きながら教室へと入っていった。

「おはよー、薫」

イライラしている時に絡まなくてもいいやつが絡んできた。薫の高校からの友達、西森健司だ。

「薫よ、お前はいつもつまんなそうな顔してんな、少しは俺を見習え！」

健治はそう言って気持ち悪い程のにやけ面を見せつけてきた。

はつきり言って気持ち悪い。他に例を上げようとすれば、一日中かかってしまいそうな程の気持ち悪さだ。

「薫よ……この健司様を無視すると全国百万のファンの方々が暴徒と化すぞ」

健司は朗々と言い放つが、いかんせん迫力がない。

元々迫力や気迫等とは最も遠い奴でもあるが。

「ふっ……嘘を付け。貴様のファンクラブ等はどうの昔に襲撃してやったわ！」

ノリだけは誰もが認める才能を持つ薫は、単純な程ノリにノリまくる。

「くっ貴様……よくも我が民を！」

「うん、バカな事言っていないで早く着席すればどうだい？先生方に

迷惑だろう？」

「うわっ、そっちから振ってきいてノリ悪っ！しかもクールキヤラ気持ち悪っ！」

朝の低体温の皆様に克を入れる、もとい怒りを買う無駄にデカイ叫び声を聞きながらも、薫はクールっぽく断固無視、

「おーい、おーい、おーい！寂しくなるだろうがああ！」

無視無視無視。

しまいには健司は発狂してしまい、顎の長いクラスメイトAあこの手により怒りの鉄拳を浴びせられているのが横目に見えたが、いつもの事だ。何も気にする事はない。

「そんな顔をしてるとバカに見えるぞ」

薫がそう言うのと健司はにやけ面をやめて、悲しそうに今は昔のとあるコマーションのチワワのようなうるうるした瞳でこっちをみてきたが、薫は断固無視した。

そんな雌雄を決する大決闘を終えた後、薫はホームルームまで暇な為、何か面白い事でも起きないかと、窓から外をぼんやりと眺めていた。

そんな自己満足ご満悦タイムを快適に過ごしている中、薫の瞳にはいつもとは違うものが映し出された。

それはさも当然のように教室に入り込んでいる少女。

（あれ、あんなやつこの学校にいたっけ？）

そう思いつつもまだ入学して二ヶ月ほどしか経っていないので、薫はそんなに目立たない子なんだろう、と思い、あまり気にしなかった。

その為、彼女が薫を窺うようにしてちらちらと視線を向けていた事に気付けなかった。

「サンちゃん、今日は遅かったじゃん、何してたの？」

これぞまさに世界の異変と言えようか。腹立たしくもすさまじき事かな、健司があの子に馴れ馴れしく話しかけていた。

（なんだあいつ？、あの女の子のこと知ってるのか）

薫は健司の思わぬ大胆行動に脳髓から足元まで貫かれたような衝撃を受け、堂々巡りの思考を数回繰り返す。

(……いや、まさか健司の彼女とか？、いやいや、健司が俺より早く彼女をつくるなんてありえねえ！！いや、だがほんとに彼女だったら……どうする！どうする俺！？)

などと薫は自身に問い掛けつつ、同時に健司に対する一方的な苛立ちを募らせつつ、ちらちらと緊迫している現場情勢を見つめる。

「うるさい！話しないで」

そんな薫の心の砂漠に恵みの雨を、そして癒やしのオアシスを作り出してくれたのは少女のその鶴の一声、ならぬ天使の一声であった。象徴的に砂漠化が極端に進行した地域も存在したようだ。所謂、健司砂漠と呼ばれる地域は砂嵐が吹き荒れ、今にも地盤沈下でも起こしてしまいそうである。

それを見て薫は心からの安堵の溜め息を零すと共に、世の中上手く出来ているのだと信じてもない神様に感謝したりもした。

(ふー、確かによくよく考えれば健司に彼女なんて、今宇宙でビツクバンが起こるぐらいありえねえ)

薫はそう思い、表向きは健司を慰めに、裏では彼を嘲笑い、そして傷心に塩を振るかの如く、見覚えのないあの少女の詳細を聞く為に彼に歩み寄っていく。

「えっと、健司。ご愁傷のところ悪いけど、お前ってあのサンって子のこと知ってるのか？」

薫が自身の机で俯き、燃え尽き、石化している健司の気持ちを考え
るといった蛇足的な事をせず、単刀直入に聞くと、健司は力無く顔
を上げ、訝しげな視線を薫に向ける。

「ほえ、薫君、頭ボケちゃったの」

燃え滓と化した健司はどうやら脳内の中枢神経まで先程の少女の強
大なる精神攻撃にやられてしまったらしい。

薫はそんな友を労る事なんてしない。彼ならきっと自分で立ち直っ
てくれる、自分で本当の自分を見つけ出してくれる、そう信じてい
るから——もとい、一々気にかけるのが面倒だから。

「そんな訳ないだろ。ていうかきしよいからやめてくれ、その口調。
全世界住民に誓ってもいい、お前がやってもきしよいだけ。それよ
りまず質問に答えろ」

薫は寧ろ健司の傷心をさらに広げるように振る舞いながら、自身の
聞きたい事を聞き出そうとする。

「ほえ。サンたんは最初から同じクラスだよ。ばっかじゃな
いのお」

殺戮衝動というものをご存知であろうか。
人は計画的にそれを抱く事もあれば、衝動的にそれを抱く事もある
そう。

薫の抱くそれは間違い無く後者であった。

「ウソは止めようね、健司君。早く本当の事言っ
て東京湾に沈もうね。そういう風に先生に教わったよ
ね」

「ほえゝ。ほえゝ。ほえゝ。」

どうやら完全に壊れてしまったらしい。

これ以上燃え滓に話しかけていても、得る物は何も
ないと判断した薫は奇声を発する健司に刹那の瞬間だけ合掌
すると、彼に背を向けた。

（……どうなってるんだよ？こんな燃え滓よりも
他の奴にも聞いてみるか、ゆかりなら真面目に答
えそうだな）

ゆかりとは薫の幼なじみであり、小学校からずっ
と同じクラス――所謂腐れ縁である。

ちょうど今ゆかりは学校に来たようで、薫はいざ
聞き出さんとしてゆかりに歩み寄る。

「えっと、ゆかり。学校に来て早々に一つお前
に質問があるんだけど」

ゆかりは寝起きが悪い。

長年感じてきた事ではあるのだが、朝彼女に話
しかけるといいう危険度の高いミッションを遂行
中である以上、細心の注意を払わずには
いられない。

下手な事を言うとか拳が飛ぶ。不快な事を言うとか蹴りが飛ぶ。機嫌を損なうとかあまりに危険過ぎるのだ。

「……何、朝から。朝からあんたのつまらない顔を見るのも疲れるんだけど。周りの人に掛ける迷惑も考えてよね」

間違い無く本日の朝の危険度はSクラスだ。

この上なく機嫌が悪い。

目覚ましに起こしてもらえなかったのか、朝食が気に入らなかったのか、登校中に黒猫の大群を見たのかは知らないが、とにかく薫の脳内には危険を知らせるアラームが鳴り響いている。

(……だが、後には退けんっ!!)

薫はここで退いては全てに敗北しているような心地がして、なんとかゆかりの神経を逆撫でしないような言葉を精選しながら言葉を紡ぐ。

「……えっと、とりあえず少しだけ聞いてくれませんか。幼なじみたるこの俺に免じて」

薫の懇願を大きな欠伸をしながら聞いていたゆかりは自身の机に荷物を置くと、渋々といった様子で薫を見る。これは一応話を聞いてくれるという合図なのだ。

ゆかりの整った顔立ちに映える大きな瞳がそれを訴えかけてくる。

それを長年の付き合いから察した薫は、自身の席であるらしい所に座っているサンという少女を指差しながら言う。

「お前って、あいつのこと知ってる？」

「当然じゃない、あんたまだクラスの子の顔と名前覚えてないの」

その言葉に薫は少しむっとしながら言い返す。

「いや何となくは覚えているよ、だけど俺はあんな子は見たことない気がするんだけど」

「ついに頭ボケた？ あんた、席が隣だからって仲良く話とかもしてたくせに」

ゆかりは目を細め、何やら健司とよく似た訝しげな視線を薫に浴びせる。

（どういう事だよ……）

流石にゆかりが薫をからかったり、嘘をついているようには見えな
い。

だがそれこそがさらに薫の抱く違和感を強めていく。

最近、記憶喪失になった覚えはない。それ故、日常の中に入り混じった違和感は明らかなものであった。

「とにかくあの子…サンちゃんの事でしょ。まあ確かに変わった名

前してるけど同じクラス！あんたの隣！わかった!？」

ゆかりはどうにも煮え切らない薫の態度と朝の不機嫌さが相まって、苛立ちが募り始めたようで、声を荒立てて言った。

「……わかったよ」

これ以上朝のゆかりの機嫌を損ねる事はこの上なく危険な行為である為、薫はやむなく聞き出す事を断念し、同時に最も有効な手段を思い付く。

（本人に聞くのが一番……だよな）

薫が最も根本的な手段を実行しようかと考えているうちに、ゆかりはぷいと後ろを向いて教室の外へと歩き去ってしまった。

薫が後で何か埋め合わせをしなくてはならないと心に肝に銘じた事は言うまでもない。

そうしなければ後が怖い。それは長年の経験から察しているつもりだ。

そのような幼なじみの機嫌を如何にして戻すかという事に思考を巡らせつつも、足はあの謎の少女……サンのもとへ向かっていた。

もちろん、単刀直入に‘お前は誰なのか？’と聞く為である。

もしもこの違和感が単なる徒労に過ぎないのなら、サンという少女に対して失礼な物言いであろう。

だが、薫にはこの違和感は明らかにはつきりとしたものであり、とても徒労で済むような事には思えなかったのだ。

その少女――サンは何の感情も表していない、ただ無表情とは違う、そんな曖昧なモノを浮かばせた表情で一人で椅子に座り込んでいた。

彼女は河風高校の制服は着ているのだが、それにも些細な違和感を感ずる。

茶色のセミロングの髪から覗く少しつり上がった瞳には誰も寄せ付けないと言っているような鋭い眼光が宿り、整った目鼻立ちは更にそれを強めているようにも思えた。

そんな異様な雰囲気醸し出す少女がこの平凡な学校に、日常のクラスににいるというのに、誰も気にはかけようとはしない。

確かにその少女はそこに居場所を持っていた。

「……少しいいか？話があるんだけど」

薫にとっては初対面である少女に慎重に話しかける。

これほどまでにクールと言える雰囲気を身に纏っている少女である。もしかすると無視されるのではないかという懸念もあった。

だがその懸念は思い過ごしであり、少女は刺々しいという印象を一番に感じさせる瞳だけを薫に向ける。

「……お前が聞きたいのは私の事？」

予想の斜め上に行く返答が、腕を組み、一見退屈そうな少女の口から放たれた。

「えっと、なぜそれを？」

「私は無駄話は嫌い。お前の指輪、その事を教えるなら多少の無駄話はするかも」

どういう事であろうか。頭の情報処理能力が追いつかない。元来成績の悪い薫にとっては仕方がない事なのかもしれない。

ただ、直感的に不思議な少女の話を聞きたがっている自己に薫は気付いた。

それは単なる純粹な好奇心の為すものであったのか、詳しくはわからない。

ただ聞いてみたい。それだけだったのだ。

「……母さんにもらった物だよ。常に外すなって言われてる。それだけだよ」

「無駄話ね。お前は何度も読んだ絵本を読んで楽しいのかしら？」

「はい？」

薫の思考回路がもはや通行止めとなりかけている中、少女は立ち上がり、薫に背を向けてしまった。

「ちょっ、お前は何か話してくれないのかよ!？」

「所詮、無駄話よ。早退するから、先生とやらの言っというて」

何という傍若無人。

騙された上、収穫はなし。謎は深まっても、探偵じゃないのだから全く嬉しくない。

そんな薫の気持ちもよそ吹く風、その少女は無言のまま廊下に出て、視界から消えてしまった。

（俺って、バカですか）

薫が途方に暮れ、と同時に必ず真実を突き止めてやろうと決心したのは好奇心が由来した、当然の事であった。

薫は気付いていなかった。

その不思議な少女の関心は、無駄、ではなかった事に。

たった一つの物に関心を寄せていた事に。

薫の人差し指には指輪があった。

鮮やかな赤の石が十字架型にカットイングされ、周りを銀にコーティングされた物。

それは綺麗な綺麗な指輪。

薫の人差し指には綺麗な指輪があった。

その後学校の授業が始まった。ちなみに薫の学力はクラスの四天王に入るほどである。

四天王：学力順位最下位から数えて四人目までの者に与えられる栄誉ある称号である。

薫は四天王No. 3だ、すなわち最下位から三番目である。ついでに健司は四天王No. 1だ。つまりクラスのバカ達の救いの存在である。

誰だって下に誰かいるのを願っているからである。

四天王No. 3君が先生に問題を当てられた時、

「X＝3X＋6Y＋9の答えは！？はい雨霧君！」

←

「アウストラロピテクス!!」

←

クラス全員がコンパスをだす

←

集団リンチ（先生有り）

これが黄金パターンである。

薫は今日は幸いにも先生からの嫌がらせに近い御指名を受ける事はなく、平穩にに過ごすことができた。

その後のいつも以上に厳しくも、楽しく感じたバスケ（薫は中学生の頃からやっている）の部活も終わり、疲れた薫はさっさと着替えて帰ることにした。

「薫　バイバイ」

「また明日な」

部室に留まっていた何人かの部活の友達が手を振り、薫も手を振り返した。

（あれ？何だ、みんなの手が……霞んでる）

薫の瞳にはどこか儚げに、涙を通したかのように朧気に見える友達の姿があった。

（……疲れてるのかな？）

視力は良く、この歳でまさか老眼はあるまいと思った薫は瞳を手で擦る。するとそこにはいつも通りに笑顔で、親しみ深い友達の姿があった。

「おう、バイバイ」

薫はそれを確認すると、挨拶を返して帰途につき始める。

（やっぱり疲れてるみたいだな……。というか健司はもうかえったのか）

薫は高校に入ってから途中まで帰り道が同じなのでよく健司と一緒に帰っている。

（仕方ないな、今日は一人で帰ろう。夕飯の材料も買わないとな）

親戚の迷惑になるのも嫌だったので、残っている父親の遺産を切り崩しながら一人暮らしを余儀なくされている薫は、もちろん炊事洗濯全てを自分でやらなければならない。

当然の如く、食料の買い出しもその一部であり、幸か不幸か、薫はスーパーの値引き時間やタイムサービス、在庫処分の時間等、あらゆる主婦的知識をその容量の少ない頭に詰め込んでいた。

今日もその生活必需知識を存分に発揮するべく、校門を出て、人通りの少ないスーパーへの近道を通る。

道は暗かった。

寿命が近い点滅する街灯。

白く光っては消え、不気味に白く光っては、消える。

道は暗かった。

遠くから聞こえる虫の声。

遠くから聞こえるだけ。

道は暗かった。

誰もいなかった。

まるで世界に人が一人しかないよう。

街灯が切れた。

さらに暗くなった。

闇に塗りつぶされた電信柱に人が一人だけいる。

胸騒ぎ。

そいつを見た時、日暮れが訪れた。

非日常

夕闇から宵闇へ——光が失われていき、徐々に辺りが闇に覆われていく時。

草木も眠る丑三つ時が最も怖いのだと言う人は数多くいるが、この移り変わりの時はいつも不穏な空気を漂わせているように思える。

それこそが眠り始める時、そして、目覚め始める時。

そんな奇妙な時に出くわした人物。

知らない人ではない。ただ、親しい人でもない。

だが、無視する事は出来なかった。この衝動が好奇心によるものなのか、それとも何か別の要因が働いたものなのかはさっぱりわからない。

ただ普通に、日常を生きる者としてのありふれた行動として、彼女に話しかけたのだと。

そう、思い込んだ。

「……こんなとこでなにやってるんだよ、お前」

‘彼女’は確かに見覚えがあった。艶やかな茶色の髪が涼しげな風に乗せられ、ゆらゆらと不規則に揺れる。

整った顔立ちに映える綺麗な瞳が薫の言葉を受けた後――否、受ける前から薫を捉えていた。

そう、薫の日常にいつの間にか入り込んでいた違和感――サンという少女がそこにいる。

彼女自身の居場所を維持したまま、サンはそこに立っている。

「……御機嫌よう、雨霧薫。朝からの疑問は解けたのかしら？」

サンは人をからかうようにクスクスと笑いながら、日常的に言う。

「サン……だったか。解ける訳ないだろ。もし良かったら疑問を解く手伝いをしてほしいけどな」

「残念ながらそれは無理な相談。でも、一つだけ言っておく。私はサンじゃない、サント・レイドル、それが本名だから」

「えっと、何ソレ。どういう事だよ？」

「だから、サンは偽名って事。お前の世界でやっていくにはこの方が何かと都合がいいの」

人の頭に疑問ばかり詰め込んでも、何の意味も持たないだろう。

だが、今の薫の頭には疑問が所狭しと陣取っている。

サン――いや、サントの言う事を理解しようとしてみても、何度も試行錯誤してみても、何の成果も上げてはくれない。

‘偽名’、‘世界’、‘正体不明の少女’、‘日常の違和感’……、様々な言葉が不協和音を奏でている。

だからこそ、嫌な予感が、そして胸騒ぎが強まったのかもしれない。だからこそ、この少女から離れなければならぬと感じたのかもしれない。

「ゴメン、俺はスーパーに買い出しに行かないと駄目なんだよ」

簡単な言い訳を盾にして、何よりも優先して先に向かおうとした。

だがその刹那、サントが霧の如く一瞬で消え、光の如く一瞬で薫の目の前に現れ、逃げ道を塞いでいた。

「えっと、これは夢だな、夢なんだ！」

胸騒ぎ、強まる違和感、湧き上がる恐怖、そして現実逃避。

薫は新たな逃げ道を作り出し、どうにかしてそこに向かおうとする。

だがその思索を巡らす前に、サントはその行動を封じるが如く、言葉紡ぎ出していた。

「……渡しなさい」

「……えっ？」

薫はあまりに動揺していた為にその言葉を精確に聞き取る事が出来ない。

そんな薫にサントは若干呆れたような表情を浮かべ、そして先程よりも語気を強めてその言葉を言い放つ。

「……お前の手の指輪を渡しなさい」

それは、まるでもはや逃げられないのだと、薫に許された選択肢はほんの僅かな、非力なもののだと突き付けているようであった。

それを避ける事は出来ない。ただ、受け止める事も出来ない薫は動揺のままに心を乱す。

「な、なんでだよ!？」

「お前に知る権利があると思っているの。さっさと渡した方がいい」

「ちょ、ちょっと待てよ!なんで理由もなく!それに昼間に話しただろ、これはいつも離すなって言われてるって!」

「おめでたい奴。そんなの私には一切関係ない。ただのお前の個人的な都合に過ぎない。ただ、あの人が欲しがっているものを私は奪い取る」

強まっていく語気。

膨れ上がっていく不安。

同じくらしい歳とは思えない迫力を宿したその仮初めの制服を纏っ

た存在は、薫の反論を一切受け付けない、寧ろ何かを言う隙も無く
畳み掛けてくる。

「……あの人って？」

それ故、薫には自分でも情けないか細い声で、手前にあつた言葉を
何の造作も加える事無く放つ事で精一杯だった。

「知る権利はないと言った」

サントはその言葉の中身の無さに気付いてしまったのか、冷たく、
ただ無情にあしらってしまう。

静まれ。

命じても、心は落ち着かない。

止まれ。

命じても、震え始めた足は戻らない。

「とにかくさっさと渡しなさい。殺すことは禁じられているけど死
なない程度ならどんなこともできるのよ」

薫はその言葉に、初めての死の恐怖により少し青ざめたが、何とか
僅かに残る冷静さを掘り出そうとする。

「……手荒なことはできないはずだろ、いくら夕方とはいえ、周り

に人がいるはず……」

薫の言葉はそこで止まった。
否、止めさせられた。

サントが何やら小さく言葉を紡いだ瞬間、彼女の手には柄から剣先まで淡い白で統一された剣が収まり、その切っ先を薫の首に突き付けていたからである。

当然の如く、銃刀法が制定されているこの日本という国では、薫は剣などといった物騒な代物を突き付けられた経験は無く、首筋からは恐怖感の膨張を表す鮮血が零れ始めた。

「……なっ、一体何なんだよっ！絶対これって犯罪だろ！き、きつとすぐに人が来てくれるはず……」

日常では経験する筈のない暴挙に苛立ちと、それに勝る恐怖を胸に抱きながら零す声は、心なしか力強さが宿らず、ただ臆病に震える。

「ふふっ。それは残念。叶うことのない願いね」

対して、サントはあくまでも冷静沈着な態度を貫き通し、まるで嘲笑っているようにも思える。

それだけで、その少女は危険な存在だと身体の全ての神経が伝えてくる。

そんないつの間にか恐怖の権化と化していた少女は口元にだけ笑みを浮かべると、その人差し指を空に向ける。

「……空遮壁」
くうしゃへき

刹那、空気が変わった。

サントの指先から放たれる白い光の雫が辺りを包み込み、やがて青白いドーム状の空間と化していた。

それは非常に巨大で、宵闇の空を消し去り、神秘的な空間を作り出している。

まるで、自分一人だけが孤立してしまったような感覚をそれは生み出していた。

「な、なんだよこれ」

サントはうつすらと笑みを浮かべ、その中に潜む余裕と絶対の自信からか、嘲るが如く薫の首から切っ先をひいた。

「これは空遮壁、私のエレメントの力、一定空間を世界と孤立させることができるの、お前の世界の言葉で言うところと結界とやつの近いかな、つまり今周りには誰もいないってこと」

（……はい？エレメント？結界？）

薫の頭は数多くの疑問符に満たされていき、繋がらない言葉が思考を乱してしまう。

「わかる？手荒なまねだっけいくらでもできるの」

サントは先程の真っ白な剣をもう一度構えた。

そしてまた一瞬で消えた刹那、薫は押し倒され首に切っ先を突き付けられる。

「渡す気はない？」

サントの平坦な声色が妙な威圧感を与えてくる中、薫は恐怖に身体を震わせながらも、決意したような声で答える。

「……これは大事なものの、いなくなった母さんに繋がっているものなんだよ！それに俺は殺せないんだろ、なら他にどんなことをされてもこれは渡さない」

少し力の戻った薫の言葉。

だが、それを聞いてもサントの表情に変化はなく、ただ冷たい視線だけを薫に向けている。

「母さんか……ふふふふ、あはははは！」

サントが表情を緩ませる事なく、馬鹿にしたような笑い声だけを響かせる。

「何が可笑しいんだよ」

「いや、お前があまりにね……同情に近い気持ちよ」

薫はその嘲るような声色の言葉に僅かな憤りを感じながらも言う。

「俺はお前に同情される要素なんて1ミクロンもないぞ」

「無知っていうのはいいことね。まあいい、話を戻すよ」

薫は納得できない、という気持ちを強く抱いたが、サントはそのまま続けた。

「あなたがどうしてもその指輪を渡さないというなら私にも考えがあるのよ、確かに私はあなたを殺せない、でもあなた以外の人間の殺害は許可されてる、ということかわかる？」

薫は真っ先にゆかりや健司のことが頭に浮かんだが、二人はすでに家に帰っているはずなので安心する。

「他の人を殺そうたって今この空間には人はいないってお前自身が言ったじゃないか」

サントはそこでフフツと笑い、薫から少し距離をとる。

瞬間、地面にゲーム等で見たような白色に輝く五亡星状の魔法陣が現れ、そこから溢れる眩い光が周囲を照らす。

薫が思わず手で目を覆う中、その光が収束し始めた時、サントは握りしめている真っ白な剣を何かに突きつけていた。

「なっ、ゆかり！」

薄ら笑いを浮かべたサントに剣を突き付けられていたのは、とつくに学校から帰った筈のゆかりだった。

「なっ、何！？　どうなってんの！　家にいたはずなのに」

異常としか思えない状況に対し、ゆかりは気が動転しているようで、早口で口走った。

動転のままに叫び散らかした後、ようやくゆかりは薫とサントの姿に気が付いたようだ。

ただ、同時にに剣を突き付けられている自分に気付いてしまった。

「えと、あんたら何やってんの！？　ていうか私、どうなってんの！？」

ゆかりの発言には混乱が入り混じり、半ばパニック状態にも見える。言っていることが無茶苦茶になりつつあるのだ。

「……ちよっと黙っといてね、ゆかりちゃん」

サントは薄気味悪い笑みをそのままにして、冷え切った声色で告げると、確かな鋭い切っ先を持つ真っ白な剣をゆかりの首へと近付けた。

「えっ！ えっ！ これって……本物？」

ゆかりの浮き沈みする声に対して、サントは小さく頷き、ただせせら笑うような仕草を見せる。

「……………」

恐怖に感情が支配されてしまったのか、意識が混濁してしまったのか、ゆかりは黙り込んでしまった。

ただ、その身体は小刻みに震えていた。

「わかる？ これも私の力。とにかくね、早くその指輪渡さないとゆかりちゃん……殺しちゃうよ」

日常でたまに聞くような冗談混じりではない、はっきりとした冷酷な響きを持つその言葉は薫の背筋をさらに冷やす。

その言葉が精神的にも冗談ではない事に加え、サントは視覚的にもそれを示すように、刃をゆかりの細い首に触れさせた。

少し力がこもったのだろう。真っ白なその剣に一際目立つ赤の道筋が刻まれ、静かに垂れ落ちた。

だが、ゆかりは受ける痛みを覆い隠す程の恐怖感からか、顔を蒼白

にしながらも、ただ無言だった。

「――やめろよ」

「ふふっ、何と言った？ もう一度言ってちょうだい」

サントは人を傷つけているというのに消えない胸糞悪い笑みを浮かべたまま刃を近づけ、剣に流れる赤が一層目立ち始める。

「や、やめろって言ってんだ！ ゆかりを離せって言ってるんだよっ！！」

「なら、さっさと指輪を渡せばいいの。あははっ、それともまだ人質が必要？ それなら連れてくるよ。例えば、健司君とか？ それともあなたの両親でもおもしろいかもね。いっそみんな殺しちゃおうか？」

「ふ、ふざけるなよ！ そんなことしたら絶対許さないからなっ！」

「許す、許さないはそっちの勝手。そうね、まずはゆかりちゃんを殺してあげる。」

「……だらだらとウザイし」

ゆかりの瞳には弱々しく煌めくものが浮かぶ。ただ、それを落とさないようにと我慢しているように見える。

そんなゆかりに対し、サントが剣を握る手に力を込めたのがはつきりと瞳に映った。

――瞬間。

「やめろーっ!!」

薫がゆかりを守るように前に出した右手――そこから突然煌めきを帯びた光が溢れる。

「なっ!　これはまさか……キャアアッ!」

光は一点に集束し、レーザー砲のようにサントを貫き吹き飛ばした。

光の色は――銀。

サントは視認するのが難しい程遠くで痛々しい音を立てながら地面に俯けに倒れる。

起き上がる様子はない。

ゆかりはサントから離れたことによって糸が切れたように地面にヘタリと座り込んだ。

薫の右手からの光は穏やかに消えていく。

だが薫の体からは銀色の光が放たれ、大気をびりびりと振動させている。

「なっ!　どうなってるんだよ、これは!?!」

声を荒げ、気付いた。

糸が切れたように座り込み、震えるゆかりの姿に。

何とか気の動転を静めようと努め、慌ててゆかりのもとに駆け寄る間に、体の銀色の光は穏やかに消えていった。

「おい！ ゆかり、大丈夫か？」

駆け寄り、見つめたゆかりの首からは未だに赤の雫が零れ落ちていたが、命に関わる程ではないだろう。

薫の身体を安堵が満たすと同時に、ゆかりも恐怖からの解放されたらしく、柄にもなく薫に抱き着いてきた。

「怖かった、怖かったよお……。もう、大丈夫だよね」

ゆかりは抱き付く腕に力を込めて、むせび泣きながら言う。

日常ではどこまでも強く、逞しく見えていた彼女の脆さに、薫は同じ日常の者として共感し、どこまでも身近に思えた。

「もう、大丈夫だ。とにかく病院に行こう」

そんなゆかりの脆さを壊してしまわないように、優しく言う。

そして、このドーム状の空間からの逃げ道を探すために立ち上がった時、遠くでふらふらと立ち上がる人影を見てしまった。

(ま、まじかよ……)

今や恐怖の権化と成り果てた存在——サントだった。

だが、足取りはふらふらとしていて、先程貫いた腹部からはどくどくと血が流れ落ちている。

それでも、この身体の震えを抑えてくれる特効薬には決してならない。

先程にも増して突き刺さる威圧感が全ての動きを奪っているようにも感じた。

それは日常の者であるゆかりにとっても例外ではないのだろう。

彼女もサントの存在に気付いてしまい、再び表情を凍らせて震える。

その中で、サントがゆっくりと歩みを進め、薫の側にまでにじりよってきた。

「……雨霧、薫。お前が、こんなところに……紛れ込んで……いた、なんてね。凄く、哀れな奴……」

先程までの薄気味悪い笑みはなく、ただ絶え絶えとなったその声色はただ恐ろしかった。

「でも、これで……お前を、いたぶる理由ができた……」

無情な表情を纏ったサントは、両手で剣を振り上げる。

薫は何とか逃れようとするが、足が動かない。

それどころかその場に座り込んでしまった。

「どうやら……さっきの魔力の放出で、体が限界に達したよう……
ね」

サントも声を枯らし、限界に近い声で言う。

「……さよなら」

剣閃を光らせ、真っ直ぐに剣を振り下ろす。
満ちているのは、恐怖だけ。

（動け！ 動いてくれよ、俺の体！）

薫の言葉にならない感情は無情にもどこにも伝わらず、剣閃がその
必死の感情さえも切り裂いてしまう――

――刹那。

響き渡る甲高い音。

同時に弾かれていた迫り来る剣。

気付いた事は、薫の周囲を何やら暖かな赤色を帯びた煌めく物質が包み込んでいるという事。

「なっ！ まさか……邪魔を、されると言うの――」

サントのその言葉が最後まで薫の耳に届く事はなかった。

もはや、薫からもサントの姿は見えない。

ただ、周りを包み込む赤色の物質が色濃く包み込み、やがてその暖かくて心地良い空間に身を委ねるかのようになり、薫の意識は遠退いていった。

サントが悔しそうに舌を鳴らした瞬間には、薫の姿はどこにもなかった。

残っているのは、未だに煌めく赤色の光の残滓のみ。

「あちらへ、行ったの……。なら、早く追いかけて……。ないと。あの、哀れな奴を……」

その呟きが終わった瞬間、サントの姿も白銀の光に包まれ、消える。

同時に場を包み込み、異質な空間を作り出していた不可思議な障壁——空遮壁も消え去った。

騒動の跡形を何一つ残さず、日常に戻ったその空間には日没後の穏やかな闇だけがあった。

そこには、人影が一つだけ。

「——かお、る……」

ゆかりが呟く。その声には一切の感情はなく、ただあっさりと暗闇

に溶けてしまった。

出会い

闇が濃い。

普段は光を与えてくれる天井に設置されたシャンデリアも、今はその役割を果たす事なく、闇の濃さがより強調される。

窓もなく、朝か夜か、それすらもわからない。

そんな部屋に一人の女性と、一人の少女がいた。

辛うじて窺える女性の表情はどこか穏やかな、それでいて厳しさも滲ませながら、漆黒に塗り潰された椅子に座り込む。

その前で一人の少女――サント・レイドールは佇んでいた。

彼女は例の世界で身に付けていたセーラー服とは異なった、上品さと高貴さが漂う白地のドレスに身を通し、正面に鎮座する女性を見据える。

「申し訳ありません。ミリアクロスの奪取及び例の少年の抹殺に失敗しました」

サントの特徴ある声色が静かに響く。もうすでに怪我は完治しているようである。

「抹殺ということは……やはり」

女性のどこか物事を憂いているような声色が耳にじっとりと残る。

「はい、おっしゃる通りでした。そしてこちらに入り込んだと思われます。」

「……おそらく边境の島、イジスにでも迷い込んだだろう」

「何故そうと？」

「残酷な運命の輪廻……とでも言うておこうか」

「なら、もう一度私が出向きましょうか」

「いや、彼は自分からこちらに来るだろう。まあ、一応偵察も兼ねて奴らを派遣しておけ」

「……わかりました」

サントは与えれた命令を実行すべく、身を翻し、部屋の扉を開く。

古びた音色を奏でながら開く扉の奥は、相変わらずの闇に満たされる。

光はどこにもない。

あるのは深い、深い闇。

扉が閉まる時、背後からは呟きに近い声が聞こえた。

「薫……お前は危険なんだよ……」

大きな部屋には小さな声は響かない。
ただ闇に吞まれて、消えるのみだった。

晴れ渡る空。

何処までも広がる青を、時折白く彩る雲。

スカイダイビングというものはこのような空の下でする事が最も気持ち良く、理想なのであろう。

それはあくまでそれを趣味としている人間に限るのだが。

「うわあああああああああつ!!」

それを趣味とはしてはおらず、むしろ初めての体験をを大絶賛実行中の人物がここに一人。

——雨霧薫である。

「やばいってやばいって！ 目を覚ましたらいきなりの強制パラシユートなしスカイダイビングっておかしくないですかっ！」

薫の背中にはパラシユートという名の生命維持装置なんていう物はない。

このまま落ちたら痛い、では済まされないかもしれない。

かといって有効な解決策が浮かぶはずもなく、見る見るうちに地面は近付き、

落ちた。

何かをクッションとして。

「痛い……。一体なんだよ今日は……。絶対厄日だ」

深く茂った木々の葉を貫き、何か柔らかいものをクッションとしたおかげか、思ったより落ちた高度が低かった為か、どうにかすり傷程度で済んでくれた事がせめてもの救いだろう。

「ていうかここ……何処だよ？」

薫は顔を上げ、周りを見る。どこかの森の中だろうか。地面について右手に感じる冷たい感覚。

それは透き通った水が静かに波を打つ泉から僅かに零れ、冷えた地面であった。

広がる木々と澄んだ水を湛えた泉。まさしく心が洗われる光景とはこのことだろう。

だが対称的に目の前には中年のメタボ気味のオッサン、後ろには同じくらいの年に見える少女がいた。

第一印象は大事だ。学生生活だろうが、社会での荒波の中であろうが、それに違いはないだろう。

だからこそ、ここは単刀直入。自身の正直さを第一にアピールする

のだ。

「あのー、ここ何処ですか？」

「んなこと知るかつ！　というか、早くそこをどきやがれっ！」

何たる言い草。

幼気な青少年の真っ直ぐな言葉を簡単に踏みにじる。真っ当な大人ではない。

そのようにして、目の前の男は薫の独断と偏見により駄目な大人の典型例――メタボニート（以下‘メタン’）とみなされた。

そのように思考を巡らせていると、薫はふとクッションとしていた物体の正体に気付いた。

それはもう一人のメタボ一歩手前オッサンであった。

メタボ一歩手前オッサン（以下メタン？）は鼻血を垂れ流し、すっかりこの世からさよなら、もとい意識を失っていた。

「……なんかすいません」

とりあえず謝って、あからさまに表情を不機嫌な色で満たしている少女にも聞いてみる。

「ここ、何処ですか？」

すると、少女はあくまで無言でメタン？を指差した。我関せずというような雰囲気で。

背後から悪寒をひしひしと感じた薫は、嫌々ながらも、壊れかけのブリキの人形のようにぎこちなく振り向いてみる。

予想通りというべきか、そこにはメタン？が明らかに、殺っちゃうよ♪な感じの雰囲気で薫を睨んでいた。勿論、右手にはナイフ。

（ワアツツ、ギミックナイフかなあ）

メタン？はそんな薫の視線を感じたのか、“切れますよ”、“本物ですよ”と言わんばかりに草刈りを始めた。

うむ、なかなかいい切れ味のようだ。刀研ぎも忘れない真面目な姿勢に乾杯。もとい完敗。

スパSPAと切り払われていく草に自身を重ねてみると、ああ、怖い。

同時に、薫の顔からは余裕が失われていった。

「――っ！　ちょっとメタン？、いきなり光り物ですか！？　銃刀法違反ですよ。しまいなさいっ！」

「うるせえ！　お前のせいで俺の相棒がやられたじゃねーか！」

「いや、それは謝ったし、それにこれは仕方がないよ。――正当防衛、あ、違うか。――不可抗力ですよ」

「うるせえっ！」

「ちよいちよいちよいちよい！　待ったはなしっすか！」

メタオ？は眉間にシワを寄せ、ただ怒りのままにナイフを振り回してくる。

本当に怖い。マジで怖い。

最近まで命の危険に晒された覚えなど全くなかったにも関わらず、
どうにも物騒なやつが増えていゐるらしい。

白い刀を持って突然切りかかってくるクラスメートとか、いきなり
ナイフ振り回すメタさんとか……。

「うわっ、いっ！」

辛うじて、地面に飛び込む事で避けた薫だったが、こんな事は長く
は続かない。

メタオ？が冷静でないのがせめてもの救いか、ナイフの動きは大雑
把で、素人目から見ても読みやすい。

だが、地面に転がったままのこの状況はかなり不利だ。地の利は全
くない。

「うおうらあ！」

まずい。

メタオ？のナイフは今度は真っ直ぐにこちらに向かってくる。
避けたくても、咄嗟の事になかなか身体が反応してくれない。

「——っ！」

目を閉じる。

諦めてしまったのかも知れない。

ただ迫り来るナイフだけがそこにはあるはずで——。

——

来ない。

痛みも何も。

恐る恐る目を開けると、そこにはうつ伏せに倒れ込むメタオ？の姿があった。

その背後に佇んでいるのは、先程まで傍観していた筈の少女。面倒そうな表情は相変わらずに浮かべながら。

「……バカっぽい。面倒増やす。邪魔。うん、三拍子揃ってるわよ、おめでとう」

いきなりの罵倒に満ちたお言葉。あいにく、それを御褒美とする性癖を持ち合わせていない薫は、思わず少しむっとする。

「いきなり初対面のやつに何言うんだよ!？」

「いいじゃない、バカっぽいんだし。それに、助けたあげたんだからお礼の一つくらいしてもいいところよ」

「……わかったよ。ありがとう」

「……案外素直なのね。それに……」

目の前の小柄な少女はまじまじと薫の身体を見渡していく。

「変な格好。このあたりじゃ全く見かけないわね。あなた、どこの人よ？」

「少なくともこのあたりの人じゃないよ。それよりもここはどこで、お前は何者なのかを知りたいんだけど」

辺りを見渡してみても、見覚えのない景色が広がるのみ。
ただ、その風景にはどこか幻想的な面が見え隠れしているようにも思えた。

「人の事を聞きたいならまず自分の事を話す事ね。そうしたら私もいろいろ話してあげるわ」

「……雨霧 薫だよ」

「ふーん。変わった名前ね。私はレフィア、レフィア・シーランスよ」

薫は仮にも恩人である相手の詳細を知るべく、レフィアと名乗った少女を観察する。

第一印象としては、小さい。それでいて、顔立ちはまるで西洋人形のように可愛らしく、整っている。澄んだ青の目がくりくりと踊り、小さな桜色の唇が表情を彩っていた。また、艶のある銀色の腰まで届きそうな髪が風でさらさらと揺れ、小柄な少女のイメージとは対照的な、大人びた雰囲気を出している。

つまり、すごく可愛い。

ふと目が合うと、何だか気恥ずかしい。

それでも、二人は澄んだ蒼を湛える泉のせせらぎに包まれながら、お互いを観察し合っていた。

レフィアは薫が無害な存在だと認識したのか、大きく息を吐き、頬を緩ませた。

「ま、面白い土産話も出来た事だし、私は帰ろうかな——っ！」

突然、レフィアの表情が歪み、痛みを堪えるような声を上げる。

そのまま、レフィアはふらりと地面に崩れ落ち、座り込んでしまった。

「え……？　どうしたんだよ？　どこか痛むのか？」

「——さっきの奴らにやられてたのかも……っ！」

と、悔しそうな表情を浮かべているレフィア。足元に目をやると、

膝からは鮮血が流れ落ちていた。

「大丈夫なのか？ 結構血が出てるみたいだけ……」

「——っ、大丈夫。じゃないかも。けど大丈夫かもっ」

このレフィアという少女、どうやら少々プライドが高いらしい。ごろつきに傷を付けられた事による悔しさも然り、どこか強がっている節があるようにも思える。

「どっちだよ？」

「多分、大丈夫。家まで行けば、止血の道具があるから。……魔法を使うのもめんどくさいし……」

何やらぼそぼそとレフィアは呟いているのだが、薫は聞き取る事は出来なかった。

「……？ まあいいや。ちょっと足、見せてみるよ」

親切心を駆り立て、足をまじまじと眺める薫。

ところがどうだろう。

レフィアの視線が痛い。

あたかも汚物を見るような視線が、なんとも痛い。

「あなた、もしかして、足フェチ？ 返答次第では串刺し、もしくは氷結の刑よっ」

なんとも失礼な物言いだろうか。

こちらの親切心を堂々と踏みにじり、ましては何やら物騒な言葉まで飛び出してくる始末。

「だあああああ！　ちげえよ！　いいから見せてみろ、お前に拒否権ナツシングウ！」

薫が宥めるように、というか小動物に接しているかのように言いながら、カッターシャツの胸ポケットから血を瞬く間に止めてしまい、傷口から細菌が侵入する事を防ぐ魔法の道具を取り出す。

そのささやかな魔法の正体は――絆創膏。

「……何それ？」

レフィアは不思議そうにそれを見つめてくる。

今時絆創膏も知らないのか？

薫は思ったが、今はこの少女の傷の悪化を防ぐ事が最優先だ。

傷に細菌が入ると化膿したりして大変な事になると聞いた事がある。

妙に心配性な薫は、それを思うと考えるより先に行動していた。

「魔法の道具だよ」

とりあえずそう答えておいた。

あながち絆創膏を初めて見る者にとっては間違った表現ではないだろう。

「魔法の……道具？　こんな魔導具は見た事ないけど……」

「魔導具？　……えっと、とにかく足見せてくれ」

レフィアは渋々といった感じにようやく足を差し出した。

薫はその足の傷を見つめ、そしてそばにある綺麗な泉の水を両手ですくい、それを使って傷口から流れ落ちる血を洗い流した。

「っしみるんだけど……もっと優しく扱いなさいよ……」

「大丈夫、すぐに終わるよ」

薫は現れた傷口に素早く絆創膏を貼り付け、ようやく応急処置を終わらせた。

「よし、終わりっつと」

薫はうんと伸びをしながら立ち上がり、大きく息を吐いた。

対してレフィアは足に貼り付けられた未知の物体を興味深そうに見ながら、それを突いてみたりしている。

やはり、小動物みたいだ。

「……何気にすごいじゃない。何これ？　なんでこんな紙切れ一枚で……魔力がこもってるの？」

「……よくわからないけど、お前の家に止血道具があるんだろ。ならしっかりと止血した方がいいよ」

「うーっ、そうね。そうするわ——っ！　まだ痛いかも……」

レフィアは立ち上がろうとするが、再びその表情は僅かながら痛み

に歪んでしまった。

「仕方ないな……」

薫は考える。

少女を家に帰す為には、その為に少しでもその負担を和らげるには、一つしかない。

それを決心すると、薫は少々恥ずかしさを感じながらも、レフィアに背中を向けてしゃがみ込んだ。

「えっ？」

「とりあえず、助けてもらったお礼っていう事で……お前の家までおぶって行ってやるよ」

レフィアは最初はキョトンとしていたが、だんだんとその頬が薄く赤みを帯び始める。

「……………そ、そ、そそそそ、そんなの必要ないわよっ!!」

顔を見事な赤色に染め上げ、声を荒げるレフィアの姿は、年相応の少女らしく、とても可愛らしいものであった。

「……必要あるようにしか見えないからな。ちなみに、そっちの拒否権は俺が剥奪しましたので悪しからず」

薫は半ば強引にレフィアを担ぎ上げると、より明るく、木々が開けている方向に向かって歩こうとする。

「ちょっと！ 何する……のよ」

「痛そうだから、助けてる」

「……………」

すると、なぜかレフィアの声が止まった。

同時に、先程まで暴れ馬の如く荒れていた身体も動きも完全に停止してしまった。

「……ありがとう」

人肌の、優しい温もりが、背中に、肩に広がった。

「……何か言った？」

「な、なんでもないわよっ！　そ、そう！　しっかりばっしりがっ
ちり運びなさい！　そういう事よ！」

どういう事だよ。

そんな事を思いながらも、深く考える事はなく、歩き始める。

薫にとっても、このような事は初めてではない。
そう。小さい頃に、幼なじみであるゆかりと遊んだ帰りにだって――

(……あれ?)

ふと感じた違和感。
何にも変わりはない筈なのに。

レフィアの身体は軽くて、女の子らしい柔らかさがあって……。

思考を巡らせ、歩いていくうちに、木々の隙間を抜け、森から抜け出していた。

抜けた先には背丈の低い草に彩られた草原が広がり、あたかもこの草原を守るかのように森の木々が取り巻いている。

その草原の中心、そこには家々が立ち並んでいるのが見えた。

おそらくあの小さな集落が、今はすっかりおとなしくなってしまう
た背中の小柄な少女の住みかなのであろう。

その後も、所々で指示を出すレフィアに従い、集落の外れにある高い丘に導かれた。

その丘の頂上付近、そこには小さな木造平屋の住居があった。

シンプルな作りのその家はお世辞にも立派な家には見えなかったが、どこか温もりを宿しているように感じた。

そう、いわば田舎の古びた家のような、そんな感覚。

この暖かな家が、レフィアの家なのであろう。

「えっと、ここでいいんだよね？」

「うん、そうよ。そっちはどうする？　ちょっと上がっていく？」

すっかり警戒心が和らいだレフィアの言葉に安堵しつつ、その親切な申し出を是非とも受けたいと薫は思った。

理由は単純明快。

今現在、自身に起こっている事が何一つわからないからだ。

地理に事情、目的に手段、生活と、聞きたい事は尽きぬ程に山積し

ている。

「是非ともそうさせてもらいたいよ。聞きたいこともかなりあるかな」

「それならどうぞ。質素な家だけどね」

レフィアはそう言うが、薫にとって、田舎の住居の持つ独特の暖かさは非常に好ましいものであった。

レフィアに導かれた、玄関の扉をくぐった先には、すぐに八畳程の部屋が広がり、その中央には木製の四角いテーブルと二つの椅子が置いてある。

おそらく、この部屋が居間であるのだろう。

その証拠となるのかはわからないが、この家にはあと一つだけ居間の奥に扉があるだけで、それ以外の部屋は見当たらない。

小さく、確かに質素な家ではあるが、薫自身の家とは違うものがあるように思えた。

そんなリラックスした感情を覚える中、薫はレフィアの促しに従い、中央の木製の椅子に腰掛けた。

「それで、聞きたいことって？」

「いろいろ有りすぎて何から聞か困ってるけど……。うん、まずここは何処なんだ？」

薫は最も根本的な質問をしたつもりであったが、明らかに呆れた溜め息をつきながら、薫とはテーブルを挟んだ椅子に腰掛けるレフィアは首を小さく振る。

「その質問、本気だったの？　ここは辺境の田舎島、‘イジス’の村、カルガリよ」

（聞いたことがない……。外国にもそんなところなかったと思うけど……たぶん）

薫は自身の学力を考慮に入れるならば、世界の地理を覚えていたとは到底感じられない。それでも、ここは何か異なる雰囲気があると感じることができた。

「……聞いた事がないんだけど。ここって地球、だよな？」

薫自身も馬鹿げた質問だと感じながらも、尋ねる事はそれしかなかった。

それは、何よりも根本的な事。

もしこの質問が否定されれば、薫が信じてきた概念が完全に崩れ去ってしまう。

「……大丈夫？　記憶喪失か何かじゃないの？」

「いや、俺に異常はない、と思う……」

「まあ、いいわ。この世界はチキュウなんて名前じゃないわ。この世界の名前は――」

レフィアの繰り出す言葉が薫の思考を激しく揺さぶる中、とどめとなる言葉が紡がれる。

「――『シギラス』よ」

めまいを感じた。

先程まで感じていた違和感が形となって襲い掛かり、思考は一時的に固まってしまう。

運命には無数の歯車があるなんて言葉、誰が言っていたのか？

薫にとって、その歯車は未知なるものを繋ぎ合わせていた。

イセカイ（前書き）

イセカイ

そこは暗闇に満ちた空間だ。

それは、この部屋に窓がないという事だけが原因ではないだろう。

この場所に立ち込める暗い感情がそれを生み出してしまっているようにも感じられる。

そう、ここは大国‘シンフォール帝国’の首都に位置する巨大城の一室。

以前は兵士の詰め所として活用され、今は異能の者たちの溜まり場と化してしまっている。

「……仕事よ」

階段を降り、その部屋に入る少女――サントは早々かつ端的に告げた。

「サントちゃん、また仕事はだるいっスよ」

溜まり場にいる複数の人物。

そのうちの一人――闇の中でも一際目立つ金色の短髪を持つ青年が軽薄な声で言う。

「そういうな、ライン。生きがいと思えばいい」

「そうはいつでもさ、ミストさんは疲れてないんスカ？」

年季の入った声の持ち主、ミストと呼ばれた男は顔にマフラーのような布で巻いており、その素顔を見ることはできない。

だが、そのどこか深みのある声色は何時聞いても、特徴的なものだ。

「私は別に。君はもっと根気強くなるべきだな」

ミストは鼻をフンツとならしながらけなすような態度をとる。

「仕事、ヒト、殺セル、殺セル！」

寧猛な獣の如く荒々しく、不快感さえも感じてしまう声の持ち主――彼は右の瞳を眼帯で覆い、ただ無差別に殺気を撒き散らしている。

「あまり殺すなどといわないでください。死人など出ないにこしたことはないのです」

ラインとは異なり少々の子供を感じさせる、落ち着きに満ちた男の声。

「五月蠅イ。猫カブリ、ウォー！ 人殺ス、勝手」

「――何ですと！ いくらあなたといえど、命を弄ぶ者は許しませんよ！」

傍目から見ると、水と油の如く交わりのない性格らしい。そんな二人が至近で睨み合い、あたかも互いの動きを牽制するような雰囲気である。

「――まったく、相変わらずだね」

サントはそんな彼らの様子を眺め、苛立ちを込めた言葉を零す。

「とにかく、クロウはどこ？」

「……僕ならここにいるよ」

威圧感を帯びた声。

その持ち主が、部屋の奥に備え付けられた階段から下りてくる。

魔力をひしひしと肌に感じる。
刺々しく、寒々しい、思わず悪寒を感じる魔力。

下りてきた青年、彼こそがクロウ・アーティス。
サントにとって、最も憎く、――殺意を感じずにはいられない人物。

彼は容姿は10代後半程度の整った顔立ちをしているのだが、その表情全てに嫌らしさが満ちている。

「で、今回の任務は？」

「イジスにいると思われる少年の搜索。特徴は……ミリアクロスを付けているからわかるでしょ」

「なんだ、そんなことか。見つけたら、殺すの？」

「判断は任せる。ところで、人数が足りないみたいだけど？」

正確には、二人足りない。

帝国の主要戦力、帝国精鋭魔導部隊、通称‘エリム’を統括する存在となってしまうているセブンスカーズ。

そのセブンスカーズという強大で、その他の帝国の機関から独立した組織は、七人の大魔導師で構成されており、その力は計り知れな

ものである。

そんな七人のうち、今、この場には五人しかいない。

おそらく、何らかの任務についてるのだと思われるが、こちらにそれが明らかにされる事はない。

それが、現状。

だから、少し聞き出す。

「ああ、あの二人は任務中だよ。まあ、それくらいの仕事なら、僕が一人で行くよ」

サントは、その二人の任務の詳細を知らない。

決して知らされる事はない。

これが、現状。

クロウはそんなサントの思いには気付いているのだろう。

嘲笑うかのような笑みを浮かべ、身を翻し、歩き始めた事は、その証拠だ。

「待て、クロウ！ オレモ人、殺シタイ！！」

先程から、殺気に満ちた、胸糞の悪い声色を出している眼帯の男は、キルドラン。

加虐趣味に満ちた、歪みきった思考を持つ彼は、新たな娯楽を確保する為、クロウに詰め寄っているのだろう。

「五月蠅いな。

――殺すよ」

サントに背を向けていたクロウが振り返り、その表情に僅かな亀裂が生まれた刹那、キルドランを遥かに圧倒する殺気、むしろ殺意の波動とも言えるものが部屋を包み込む。

これは、知っている。

クロウは機嫌を損ねた時、このような状態になる。

ひしひしと感じる悪寒。

不幸な事に、それを正面から受けてしまったらしいキルドランの表情はくしゃくしゃに歪み、身体は床へと崩れ落ちる。

全身が痙攣しているかのように、ぴくぴくと震えている。

これが、セブンスカーズのリーダーであるクロウの力の片鱗である
と言えるだろう。

「―ース、マン、クロウ……」

殺気が消え失せ、怯えに満ちた声色。

これが、キルドランという男。

要するに、弱者を虐げる事のみ悦びを覚える、最低の男だ。

その存在は、セブンスカーズの中でも異質なのか、他のメンバー達
もどこか冷ややかな視線をキルドランに浴びせているように感じら
れる。

「わかってくれるのならいいさ。それじゃあ、任務に就くとするよ」

クロウが部屋の奥で姿を消した時、ようやく部屋に満ちていた殺意
の空気が消える。

おかげで、サントには思考を巡らせる余裕が出来た。

(……クロウ。私がお前を、利用してやるっ)

エレメントを統べる男、クロウ・アーティス。

彼を利用する。

今、サントはそれだけを思っていた。

「ふふっ、あはははっ！」

サントは笑う。

ただ、無機質に。

頭の中が真っ白になる。何も考える事が出来ない。茫然自失といった言葉はこのような状態の時に適応されるのであろう。

再びの不協和音を奏でる言葉達。それらが正面から突き刺さってくる中、とても正常な心地ではいられない。

「……な、なんだよ、それ？」 シギラス”？　こ、こんなのおとぎ話の中のものだろ！」

だからこそ、心地を乱し、ただただ混沌のみを齎す言葉をどうにか否定しようと、震え切った言葉だけが溢れてくる。

否定。

そんな事をしたところで事態が好転するわけでもない。そんな心地を、先程出会ったばかりのレフィアが察してくれる筈もない。

その表情は明らかに、ただ何か可笑しなものを眺めているような、怪訝なものでしかない。

「本当に大丈夫？　頭とか強く打った？」

「おかしいのはそっちだろ！　ありえないだろ、こんなの」

「いったいどうしてって……——って、それっ！」

薫は表情を変える事が出来ない状態だというのに、レフィアの表情はめまぐるしく、多彩に変化する。

先程までは怪訝な表情であったものが、今度はなにやら驚きに満ちた表情に。そしてやがて、何かに得心がいったような、確信に満ちた勝気な表情に。

それは人間らしさを感じるものであり、今の薫にとっては、些細ではあるが、気休めにはなる。

「ど、どうしたんだよ？」

「それよそれ！　あんたの指先のやつ！」

レフィアの視線を追ってみると、そこにあったのは、赤の煌めく石が埋め込まれた十字の指輪。

同時にそれは薫に現実と化してしまった非現実を思い出させるもの。

先程、自身の現実で起きたサントの襲撃。思い出すと、今でも命が脅かされた危機感と、気持ちの悪い悪寒が蘇る。

サントが指輪を欲する情景と今の状況を重ねてしまったからであろうか。

身体が震える。悪寒が走る。

「こ、これは渡さないからなっ！」

レフィアはサントとは違う。先程は助けられ、人のいそうな集落までの案内もしてくれた。

薫はそれはわかっていた。だが、警戒心を抱かずにはいられない。あれほどの危機に直面したのだから、それは仕方のない事だろうと、薫は心の内に言い聞かせる。

「いらないわよ。ちょっと見せてほしいだけ。情けない顔して何言ってるんだか」

「ならいいけど。あと、情けない顔なんてしてない！ たぶん」

「鏡見てきたら？ あまりの情けなさに逆に吹き出すかもね」

このレフィアという少女、小柄で非常に可愛らしい容姿とは裏腹に、その性格はどこか勝気で、その発言にはどこか刺々しいものがある。悪戯っぽい笑みを浮かべながら、その毒を含んだ言葉を叩きつけてくるその様子は、まさにその性格を表しているように思えた。

そんな薫の些細な思案も他所吹く風。

レフィアの興味は薫の指先の指輪へとすっかり移り変わっているらしく、まじまじとそれを見つめ、再びの表情変化でまたも確信に満ちた表情へと変化した。

「あんた、この世界の事、全く知らないのよね？」

「……当たり前だろ」

「……なるほどね。じゃあ、おそらくあんたはこの世界のヒトじゃない……。……——別の世界から来たヒトよ！」

目の前が真っ白になった。再びの思考停止。その言葉を反芻しようと心がけても、ただただその強い印象だけが心に焼きつく。

奏でられる不協和音。わかっていた。この世界は根本的な何かが違うと。現実と化してしまった非現実だと。

思えば、サントと遭遇した時から、この現実からの乖離は始まっていた。

それでも、認めたくなかった。

認めてしまえば、自己の価値観が崩壊する。
心が揺さぶられ、折れそうになる。
どす黒い感情が生まれてきてしまう。

帰れるのか？

———生きれるのか？

「あんたにとってこの事実は大変な事なのかもそれない。だけど、受け入れなさい。これが、現実よ」

聞きたくない。

聞きたくない。

認めたくない。

レフィアの諭すような言葉、それがあまりにも怖い。

心が希望と絶望に二分されていく。

「とにかく、まず、あんたがこっちの世界に入り込んだ原因だけど

—————」

言葉が聞こえなくなった。

絶望が希望を侵食し始めた瞬間、心が全てを拒否した。
それを感じた時、薫は駆け出していた。

家を飛び出し、草原を駆け抜けた。

背後から、レフィアの声が聞こえた気がする。
だが、聞こえなかった。聞きたくなかった。

イセカイ（後書き）

考えた結果、こちらの作品は別サイトの原作の流れを踏襲しつつ、リメイクする事にしました。少々展開が異なる場面がありますが、おおまかなストーリーに変更はありません。

異世界

考えてはなかった。

否、何も考える事は出来なかった。

ただただ無心のまま駆け抜ける。

見覚えのない草原。

見覚えのない集落。

見覚えのない森林。

見覚えのない山影。

見覚えのない世界。

考えたくなかった。

考えると、真っ黒な感情が湧きあがる。

それが怖くて、怖くて、堪らなくて、薫はただ駆け抜ける。

見覚えのない草原を、集落を、森林を。

それらから目を逸らそうと、必死に。

息が切れる。激しい動悸を感じる。
それでも、立ち止りたくはなかった。
全てを否定するという方法でしか、薫は自己を保てなかった。

辺りは、森林。

鬱蒼とした野草が絨毯の如く生え、背の短い木々と高い木々がお互いに日光を求めているかのように折り重なり、昼間なのにも関わらず、不気味な薄暗さを作り出してしまっている。

足が野草に取られる。蔦が絡みつく。

瞬間、バランスを大きく崩す感覚に襲われる。

「うつ……ぐ……」

バランスを崩した身体は地面へと投げ出され、受け身を取る余裕もなく、ただ無防備に叩きつけられる。

痛い、という感情が芽生え、よろよろとどうにか全身に力を込め立ち上がる。

——瞬間、響き渡る背の高い野草を揺らす音。そこから出てきた存在は、見覚えのない未知の存在。

「う、な、なんだよ、こいつ……」

そいつは、見た目と大きさは狼のようだった。

だが、それは未知の存在。そいつの体毛は鮮血の如く真っ赤に染められており、口元からは真っ赤な液体が気味悪く零れ落ち、そこから覗く鋭い牙も真っ赤に染まり、腐乱臭のような悪臭さえする。

何よりも薫の知る狼と違った点は、目が三つある事。

通常の目が二つと、額に一つ。その瞳は真っ赤に充血しているかのようで、そこからも真っ赤な液体が零れ落ちている。

気味が悪い。

”魔物”、そう形容する言葉だけが薫の脳内に浮かび、やがて尋常でない恐怖に支配される。

「う、や、やめろ……」

”魔物”がにじり寄る。獰猛な唸り声、腐乱臭を伴う吐息をばら撒きながら。

恐怖を薫に植え付けながら。

「う、うわああああああっ！」

薫は咄嗟に足元に落ちていた木の枝を拾い上げ、”魔物”に投げつける。

消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ。ただそう念じつつけながら。

それでも、決して消えてはくれない。

”魔物”は投げつけた木の枝をいとも容易く噛み砕き、不気味な雄叫びを上げ、尋常ではない速さで突進してくる。

もう声を出す余裕もなかった。

腐乱臭が、嚚猛な唸り声が、鋭い牙が、未知への恐怖が瞬間的に襲いかかる。

もう終りなのだと。

そう心が悟り、もうこれ以上現実を見続ける事にどうしようもない程、嫌気がさして。瞳を閉じた。

「そこのバカ、伏せなさい！」

澄み切った声が響き渡った。

その言葉は微かに心にまで響き渡り、反射的に頭を抱え、地面に伏せていた。

瞬間、不気味な程に甲高い、断末魔の声の如き”魔物”の鳴き声が響き渡った。

どうにか確認しようと顔を上げると、そこには異常なほどに赤黒い血のとうな液体を吹き出しながら、苦しみがいているように見える”魔物”の姿があった。

そのもとを辿ると、そこは”魔物”の腹部。そこには綺麗な水のような、澄み切った青色の矢が突き刺さっていた。

矢は背後から飛んできたようだ。

それを確認すべく、咄嗟に背後を振り返ると、そこには先程まで一緒にいた、イセカイのヒト、レフィアがいた。

微かな日の光を受け煌めく銀の長髪を靡かせ、その瞳は澄み渡る蒼。その意志のこもった瞳はいまだに”魔物”を見据えているようだ。そして、その小柄な身体、その手に握られているのは、矢と同じ澄み切った青色の弓。

レフィアは再びどこからともなく矢を取り出すと、慣れた動きで弓にかけ、射出する。

速い。その動きは極めて俊敏で、放たれた矢は即座に、再びの甲高い鳴き声を生み出していた。

それでも、レフィアから目を逸らす事が出来ない。それ程にその動きは美しく、洗練されていた。そう、それは心の中に生まれ、膨張していた絶望をかき消してしまう程に。

「：あ、ありが、とう」

あまりの出来事に絶句していた中、発する事の出来た唯一の言葉。それは確かに自己の言葉であった。

それがレフィアに聞こえたかはわからない。

ただ、彼女は歩み寄ってきた。意志のこもった瞳をそのままに。

「……さがってなさい。そいつはまだ生きてる」

レフィアは端的に、無表情にそれだけ告げると、薫に背を向け、魔物と対峙する。

そこで確認した魔物の姿は、先程よりも遥かに弱り切っているが、確かに息はあった。よろよろと身体を引きずりながらも、いまだに鋭い牙を剥き出しにし、襲いかかる機会を窺っているように見える。

ただ、レフィアに対して警戒しているのだろう。先程のように突進はしてこない。

当のレフィアは特に怯える事も、震える事もなく、凜とした姿だけをそのままに、魔物と対峙している。

瞬間、魔物が動いた。先手を取ろうとしたのか、場に満ちた緊迫感に耐えられなくなったのか、赤黒い血をばら撒きながら、レフィアに飛びかかる。

「……チェイン、モデル” s w o r d ”」

レフィアが避ける事もなく、短く言葉を零した刹那、一瞬の青の光

が辺りに満ちる。

まさに、一瞬の出来事だった。

魔物の身体から大量の赤黒い血が吹き出し、地面に崩れ落ちる。一目で致命傷だとわかる程の血。加えて、異常な程に甲高い断末魔の叫び声。

腹部を切り裂かれたらしい。そこから止め処なく流れる赤黒い血が、その魔物の確かな絶命を物語っている。

そこで、ようやくレフィアに目を向ける余裕が出来た。

その表情は先程までと変わらず、凜々しいまま。ただ、その手には先程の弓とは異なり、弓と同色の、澄み切った青色の剣を握りしめている。

そのレフィアの小柄な身体にあった小さめの剣から零れ落ちる魔物の鮮血が、今現在起こった出来事の一部始終を露わにしている。

異世界（後書き）

この話はまだ続きます。次回はこの続きから執筆します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0954x/>

永遠のエLEMENT ~the eternal knight~

2011年10月3日16時59分発行